



ブルガシ市のイベントでダンスを披露するサンバルカンのメンバー

まとも ひうち 「ありがとう」から広がる笑顔

若い民族衣装を身にまとい、バルカンダンスというブルガリアの民族舞踊を、今年の川越百万灯夏まつりで披露したグループがありました。グループ名は、サンバルカン。輝く「太陽」とブルガリアが位置する「バルカン半島」に由来する名前です。グループは、踊りを通してボランティアに取り組んでいます。

福祉施設に入所している人たちを励ましたいと、東ヨーロッパにあるバルカン地方の音楽に興味を持って、若海美智枝さん(63歳・久下戸)が、仲間と踊りのグループを結成したことが活動のきっかけでした。メンバーは、主婦を中心とした二十五人。ふだんは、南古谷公民館や東中学校の武道場などで練習します。

バルカンダンスは、曲ごとにステップが異なり、多い人で三百曲以上のレパートリーを持つそうです。独特の拍子の曲、それに合わせるステップは、小刻みで速い動きのため、相当の体力が必要。体験学習会を行った中学校では、動きの速い踊りに根を上げてしまう生徒がたくさんいたとか。昼間の暑さが残る武道場での練習は、踊り始めるとすぐに汗が噴き出します。休憩は一、二分ほど。メンバーは、水分補給の間を惜しみ、呼吸を落ち着かせて、次の曲のステップを踏み始めます。華やかに見える踊りは、日々の練習の積み重ねがあつてのものです。

老人ホームの訪問などでは、踊りの合間、すぐに息を整え、お年寄りとは談笑するメンバー。疲れた様子は



華やかな踊りを支える厳しい練習

少しも見せません。「踊りを一緒に楽しみ、喜んでいただくと、私たちも元気をもらえます」とメンバーの佐藤洋子さん(58歳・藤原町)。「見られるだけでなく、一緒に楽しんでもらいたい」という思いは、活動を始めたときから二十七年後の今でも同じ。訪問先では、踊りに合わせてペットボトルを活用した手作りのマラカスなどでリズムを取ってもらいます。「音楽に合わせて体を動かすと、皆さん生き生きして、活動的になります。歩くとき、つえが必要だったお年寄りが、つえを使わず帰られたこともありました」と若海さんはエピソードを披露してくれました。

サンバルカンは、ブルガリアの文化紹介にも積極的です。七年ほど前から交流しているブルガリア共和国

大使館から本国でのイベント参加の案内を受け、8月23日から五日間行われた、第三十八回ブルガス民族舞踊フェスティバルに参加。はるばる日本からやって来



福祉施設でのボランティアの様子。リズムに合わせて、体が自然に動きます

たグループということもあり、参加した十か国の中でも注目を集めたとか。メンバーはブルガリアでのモチベーションに、終始感激だったそうです。また、盆踊りなどの日本文化を披露したほか、菓子屋横丁で買い求めた組みアメを贈り、川越をアピール。滞在中、本場のダンスレッスンを受けることもでき、今回の訪問は、充実した時間を過ごせたそうです。

福祉施設などを訪問の際、ブルガリア語の一言会話を教える皆さん。帰り際に「ブラゴダリヤ」と感謝されることも多いそうです。「私たちこそ、喜んでもらった笑顔から元気をもらい、ブラゴダリヤという気持ちでいっぱいです。踊りを通して笑顔が広がるとうれいですね」と若海さんは笑顔で話してくれました。

*ブラゴダリヤ＝「ありがとう」を意味するブルガリア語

華麗な技で世界をリード



芳野台体育館で練習する西垣さん(写真上)と飯島さん(同左)

8月にノルウェーで行われたバトントワリング世界選手権で、日本代表の西垣知枝さん(20歳・小仙波町4丁目)が優勝、飯島友美さん(24歳・新富町1丁目)が4位入賞しました。2人とも小学1年生から競技を始めた世界レベルの実力者。西垣さんは「表現力が課題。人をよく観察して“表情”を身に付けたい」。飯島さんは「技術を高めるため、もっと反復練習が必要」と、すでに次の目標を見据えています。友人とのおしゃべりが楽しみという西垣さん、4匹の飼ひ猫に癒されるという飯島さん。つかの間の休息が、次の大会に向けて集中力を高める原動力になるようです。

目標は世界チャンピオン

ひま
ち

ふ
お
と
こ
こ
ろ
ス

ひま
ち

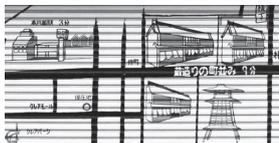
後楽園ホールで8月に行われた、U-15ボクシング全国大会。城南中学校2年の榊原達也くんが、37.5kg級で、日本チャンピオンに輝きました。これで、国際ジュニアキックボクシングフライ級のチャンピオンとの2冠を獲得。トレーナーでもある父親の貴雄さん(37歳・砂久保)の指導を受ける達也くんは、「自分と戦って負けた相手のためにも、負けるわけにはいかない」という気持ちで試合に臨むそうです。学校から帰ると、弟の雅也くん(11歳)や仲間と2、3時間トレーニング。「WBAスーパーフェザー級王者の内山高志選手のような、大きな相手にもひるまず前が出る、強い選手になりたい」と目を輝かせていました。



行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひま
ち



川越工業高校
の作品



シャッターアートで街を明るく
クレアモール沿いの店舗で、シャッターに絵を描く取り組みをしているのは、川越工業高校の生徒たち。同校では、落書きを消すことで、地域に貢献できればという思いから、六年前に始めたそうです。製作中は通りがかりの人から応援の声をかけられたり、完成後は店主から感謝されたり。高校生の感性を生かして仕上げられた絵は、これまでに十枚。デザインを考えた二年生の町田菜々さんは、「自分の得意な絵で、多くの人の役に立てたことがうれしい」。生徒たちにとって、充実感あふれる製作だったようです。

仲町交差点から南に向う通り沿いの店舗では、東洋大学の美術部員がシャッターに絵を描いています。店が閉まっていても通る人が楽しめるようにしたい、という先輩たちの思いを引き継ぎ、今年で六年目。デザインは、ティーカップやベビーカーなど、店にちなんだものを店主と相談して決めます。色づかいは、蔵造りの町並みを意識し、工夫しているそうです。同部の清水翔太さん(20歳)は、新しく絵を描くこととすでに描いた絵のメンテナンス、この両立が課題。これからも、心を込めて描きます」と抱負を語ってくれました。

東洋大学の作品

